

須磨源氏

世阿弥作

前

ワキ 藤原興範

シテ 樵の翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 光源氏

地は 摂津

季は 三月

「八重の汐路の旅の空。く。九重何くなるらん。

「抑是は日向の国宮崎の社官。藤原の興範とは我事なり。さても我鄙の住居なるに依つて。未だ伊勢太神宮へ参らず候ふ程に。此度思ひ立ち。伊勢参宮と志して候。

「旅衣。思ひ立ちぬる朝霞。く。弥生の空も半にて。日影のどこに行く舟の。浦々過ぎてはるくと。波の淡路をよそに見て。須磨の浦にも着きに

けり。く。

「やうく急ぎ候ふ程に。津の国須磨の浦に着きて候。此所は聞き及びたる源氏の大將住み給ひし在所にて候。又承り及びたる若木の桜をも一見せばやと思ひ候。

「浮世のわざにこりずまの。猶こり果てぬ塩木かな。松ならで又煙と見ゆる。是や真柴の陰ならん。

「是は須磨の浦に旦暮に釣を垂れ。焼かぬ間は塩木

を運び。浮世を渡る者にて候ふなり。

詞

「又此須磨の山陰に一木の花の候。名におふ若木の桜なるべし。古へ光る源氏の御旧跡も。此所にて有りげに候。

下歌

「我等賤しき身なれども。有りし雨夜の物語。

上歌

「聞くにも袖をうるほして。く。山の薪の重きにも。思ひ櫛を折りそへて。彼古墳ぞとゆふ花の。手向の梢折々に。心を運ぶばかりなり。

詞

「暫く柴を下し花をも詠めばやと思ひ候。

ワキ詞

「いかには是なる翁に尋ぬべき事の候。

シテ詞

「何事にて候ふぞ。

ワキ

「其身は賤しき山賤なれども。此花に詠め入り家路を忘れたる気色なり。若し此花は故ある木にて候ふか。

シテ

「賤しき山賤と承り候へども。恐れながらそなたをこそ鄙人とは見奉りて候へ。さすがに須磨の若木

の桜を。名木かとの御尋ねは。事新らしうこそ候
へとよ。

ワキ 「げにく須磨の山桜。名におふ若木の花ぞとて。
はるぐこゝに分け入りて。

シテ 「わざと詠めの御心ざし。

ワキ 「日もはや暮れて須磨の浦の。

シテ 「さらば里にもお泊りなくて。

ワキ 「野を分け山に。

シテ 「来り給ふは。

地 「関よりも。花にとまるか須磨の浦。く。近き

後の山里の。柴と云ふ物まで。名をとりぐのわ
ざなるに。只心なき住居とて。人な賤しめ給ひそ
よ。人な賤しめ給ひそ。

ワキ 詞 「いかに翁。古へ此所は光る源氏の御旧跡。ことに
御事は年ふりたる者なれば。源氏の御事物語り候
へ。

地クリ

「忘れて過ぎし古へを。語らば袂やしをれなん。我
空蟬の空しき世を案ずるに。桐壺の夕べの煙。絶
えぬ思ひの涙をそへ。

サシ

「いとゞしく虫の音しげき浅芽生の。

地

「露けき宿に明け暮らし。小萩が本のさびしさま
で。はごくみ給ひし御恵み。いとも畏き勅により。
十二にて初冠。高麗国の相人の。附けたりし始め
より。光る源氏と名を呼ばる。箒木の巻に中将。

紅葉の賀の巻に。正三位に叙せられ。花の宴の春
の夜の。行方も知らで入る月の。おぼろけならぬ
契り故。年廿五と申せしに。津の国須磨の浦。海
士人の歎きを身に積みて。つぎの春。播磨の明石
の浦づたひ。問はず語りの夢をさへ。現に語る人
もなし。去る程に。天下に奇特の告有りしかば。
又都にめしかへされ。数の外の官を経て。

シテ

「其後うちつゞき。

地

「滯標に内大臣。乙女の巻に太政大臣。藤の裏葉に太上天皇。かく楽しみを極めて。光る君とは申すなり。」

ロンギ地

「さてや源氏の旧跡の。分きて何くの程やらん。委しく教へ給へや。」

シテ

「何くとも。いさ白波のこゝもとは。皆其あとゝ夕暮の。月の夜を待ち給ふべし。もしや奇特を御覧ぜん。」

地

「そもや奇特を見んぞとは。何をか待たん月影の。」

シテ

「光る源氏の御住家。」

地

「昔は須磨。」

シテ

「今は都卒の。」

地

「天に住み給へば。月宮の影に天くだり。此海に影向有るべし。かやうに申す翁も。其品々の物語。源氏の巻の名なれや。雲隠れしてぞ失せにける。」

雲隠れして失せにけり。
(中入)

ワキ詞

「さては源氏の大將かりに人間と現じ。我に言葉をかはし給ふか。いざや今宵はこゝに居て。猶も奇特を拝まんと。」

歌

「須磨の浦。野山の月に旅寐して。く。心をすます磯枕。波にたぐへて音楽の。聞ゆる声ぞ有難き。く。」

後ジテ

「あら面白の海原やな。我娑婆に有りし時は。光る源氏といはれ。今は都卒にかへり。天上の住居な

れども。月に詠じて閻浮にくだり。所も須磨の浦

なれば。青海波の遊舞樂に。引かれて月の夜汐の波。かへすなる。波の花ちる白衣の袖。

地

「玉の笛の音声澄みわたる。」

シテ

「笙笛琴箏篳孤雲のひゞき。」

地

「天もうつるや須磨の浦の。荒海の波風しんくた
り。」

ロンギ地

「雲となり雨となり。夢現とも分かざるに。天より

光りさす。御影の内にあらたなる。童男来り給ふぞや。さては名にしおふ。光る源氏の尊霊か。

シテ「其名もよそに白浪の。こゝもとは我住家。猶も他生を助けんと。都卒天より。二度こゝに天くだる。

地「あら有難の御事や。所は須磨の浦なれば。

シテ「四方の嵐も吹き落ちて。

地「薄雲かゝる。

シテ「春の空。

地「ぼんじやくしわうの人天に。下り給ふかと覺えたり。所から山賤へきらいはれし。ゆるし色の綺羅なるに。青鈍の狩衣たをやかに召されて。須磨の嵐に翻し。袂も青き海の波。颯々の鈴も駄路の。夜は山よりや明けぬらん。く。